



正未彈正時獨る。素大夫いひて周章とて。必ひけるに執夏未臨宮内の大
變鮮血の汚穢且彼方へ便室指し先立んとする時綱急よめとる否聊の
妨は執緒りてそが儘といふよとる。鮮衣ホゴ俯る一室へ誘引し時綱と
左見右々々教回嘆息し婦人稀るる心烈勇敢下司は他ける忠心
義胆緯の越彼如より。大くえりやりて。感涙袖を濡しとる。これり
たふふまるとの今一歩早うせむ。影のふがひるく自殺とさせんや。悼むべし。
嗚呼惜むべし。寔ふ人の爲命の皇天も祐がく。鬼神も赦ふよとる。此
歎と悔と臉とをまぐとて。只管嗟嘆とく。いづく。素大夫はわきなく愧て
又いふよりとる。りけり。當下時綱貌と更り主人のいまど。睦くむ。賢妻
義僕が命を捨てる。この癖者と誓さる。せむ。和敵のそ。會執言の恥。雪めて
継橋の家の深よめとる。びあふべし。やぶ。淵之助が刀とて。あふ。く。と。く。せむ。

素大夫つるく。あふ。狐の皮と伴の刀を搦とる。血を推拭ひうら返す。うち。は。こ。を
大に。敬馬とこれいふ。ふと。折る。時綱も又。信とん。刀の長は二尺四寸。二尺四寸。二尺四寸。二尺四寸。
陽雨候と家り。四寸八四時と表し。鞆の銀の半月とる。といふ。素大夫膝の
上。受り。鞆と左。は。採り。宣ふ。所。違つ。と。疑ふ。べし。も。あ。く。の。續。月
形の宝刀とこれいふ。と。是と。前妻の兄。淵之助の。裏。上。総。あり。
比。目。と。六。と。渾。名。せ。れ。この。宝。劍。の。盜。賊。と。る。と。あ。ふ。の。と。い。ひ。る。が。く
舊。縁。の。と。絆。と。く。四。月。の。比。より。旅。宿。と。共。し。只。誠。と。り。て。交。り。ら。れ。よ。り
先。小。が。宿。遣。せ。し。あ。ど。鮮。衣。ホ。の。と。る。と。と。渠。我。誓。と。る。と。遂。は。宝。刀。と。り
獲。る。その。大。功。は。比。と。る。所。る。に。と。魯。鈍。と。あ。も。か。く。も。面。目。は。し。ま。る。
み。く。も。淵。之。助。が。腰。に。帶。る。一。刀。は。正。し。竹。籠。り。け。る。よ。この。月。形。の。い。ふ。ふ。と。
これ。あ。く。の。世。の。此。の。淵。之。助。携。て。ま。る。と。る。え。これ。ら。の。と。く。と。く。あ。く。の。執。夏。の

聡察豫くより。天眼鏡にて照らすとが如しと嘆賞慚愧今又その子の
 の踏どころなるをぬきては是れやういふ。又その鞋とされ彼とさういふ
 つ刃と納め眉は齊しく左右のふ小棒のさうく時綱は追ふべきやとさう
 取て室刀の彈正あがりぬ日るさう守へ披落せん抑これのさうの助
 室刀の盜賊豊六へと定ふこれ我知るる。さうさうのさうめられん。且その
 澄振系アせんぞ。といひつ扇と颯と閃々。外面はさう招けがりの後集合
 え正未が夥兵五六人槐の蔭より立頭と眩子高く縛る。両個の癖者と引立
 つ。縁類近く推居る。時綱夥兵と争ふ。又素大夫さうち對ひ今引居
 る罪人の豊六が支堂は五十井墨太田子江尻三といふ野がせりえその
 一昨年豊六を捕漏せしと生拘つ久しく禁獄せられしもの罰一等降
 させし。追放させし奴原えさうさう某いふ比より。君命はうけるもの。

府臺の城廓とより立んとくこの地はまう。勤務の暇彼此を徘徊しけふ
 とくを彼奴二人を捕捕り。いさ責辛く向ひ苦痛めはさうさうの某
 らみさせん。此の罪人の。遠く境を追はる。墨太脱三といふ。め
 彼豊六が博徒の年来武苑相摸の同。流離くは終る。豊六がゆへに
 ちくどいひいひ。日安雞尾のほろろ。曠野を豊六が環會。道次は
 ろろ。別離の情と述す折大なる野猪異穿る。牙は掛んとさういふ。豊六
 こい雄も引く。只一脚は蹴殺めは某少の野猪より。渠が勇力。豊六は
 又ひ小馬の度我は豊六自若と塵うち拂ひ某少は伴ふ。東は投て
 後。密やう相譚さう。豊六はこれ里見の追捕を殺脱す。奥のさう走
 途。さう。独ぼく。と尋思さう。金剛神と賭さう。勝てさう。我獲られた
 僅に三年は限り。さう。久しくかてある。さう。今。さう。力。乗。

目ざし死研り成さればこそ人ぬきとて追とめされ虎の猛なる併死に
 鯨のおもひびらるる。錢は傷らる。脊力ありとてとて隠し。要緊の時
 本事業は出づる人よきとてとて捕らるる。あはれとて只顧りひ決りて
 小竊とのまきとて。懐寂しくる。隨ふ。樹葉啜りて奪ひとりて刀を
 售むやとて人よきとて。警嘆し。豫めく里見の車室藏
 月形の刀は秘する。果しく月形るる。身を護り。厄と脱る。奇特ある。萬
 貫の袂とて。價は論じ。購めあり。まゝのあれと彼月形は里見家
 より穿鑿嚴しく。とて。素らるる。灰はゆるる。とて。あはれとて。ひび
 賞賞まじ。そのまじ。ゆめゆめ。許す。賞錢と。まじ。と。真成は
 示さるる。このまじ。ゆめゆめ。彼刀の奇特は。遠は。售らる。と。や
 その短立去わら。穿鑿せらる。と。ゆめゆめ。故は。月形と。巨は。ら

筒は隠し。頭の一節。米は。起ると。杖と。櫛と。居ると。坐右に。置
 腰に。帯。行刀。竹篋。刀。換。入り。筒。袴。研。花。の。下。紙
 同。と。流。転。と。件。の。米。出。と。今。野。猪。殺。と。辛。介。ら
 らの竹刀と。抜。出。と。脱。と。今。野。猪。殺。と。辛。介。ら
 腕。辛。介。ら。已。て。成。る。と。今。茲。四。月。の。上。野。草。津。で。こ
 竹刀と。竊。や。引。抜。え。と。旅。人。あり。這。奴。の。か。り。と。里。見。家。の。密。使。り
 下。と。多。い。と。殊。更。は。懇。や。と。文。參。つ。定。不。同。は。被。旅。人。の。怨。角。の。や
 別。と。と。妹。の。夫。ら。と。緋。の。ぐ。と。分。明。と。と。些。心。の。お。ち。り。と。色
 とう。これ。の。乳。名。の。例。之。助。と。と。果。は。と。と。下。と。と。栗。が。来。麻。呂。根。根。被。と。り
 尋。と。と。妹。と。と。十。年。已。前。生。別。と。と。怒。と。這。奴。と。と。三。世。相。と。と。く
 志。れ。と。と。後。妻。と。と。女。見。と。と。産。と。と。家。の。甚。飾。の。真。間。と。と。頻。り。と。と。帰。郷。の。念

おまは葛飾へ行くゆゑと云ふ。これ又宵の討技おまはる共草津渡で
 その家路と云くは妹夫婦の昨夜より。俄頃病にござりひく。今朝も
 桶川の旅宿ふと。これの真向へ赴くわ。おまはるも病にござりひく。今朝も
 環會されば経営も為易し。と云ふやうに。這奴が宿所へおまはる。彼後妻對面
 あつた。昨夕桶川中。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。
 此赴はく。えとらるる。空蟬の生のうち。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。
 目今幾足し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。
 房と女の子と俱く。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。
 袂衣裳もく。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。
 目よ。賣む。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。
 けつ。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。

ろ。四月の比。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。
 の。宿賃の。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。
 勢。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。
 さい。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。
 あく。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。
 搦。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。
 賢妻。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。
 べく。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。
 ち。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。
 刀。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。
 肩。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。おまはるも病に命危し。

志ひ瓜立地を釋し、ある人某一昨年猶業あり。宝刀を奪ひて、夜に
 野于王の岡かりり。豊六は認め、其固より豊六が真白の冠なり。と
 言ふ。丁七も亦集定ふ。ある人、故に某の盗は糧を
 齎し、妻と奴隷を自殺せり。その功ありと。け面ると、榮辱雲壤の差あり
 とも。その甲乙は他人はあり。夫婦主後が志暗合し、素懐成遂し。某
 固より不忠存せざり。執事これの趣好意、以てこれの執事と
 あり。ある人、幸ある人と他事なく、憑り時網の欣憂と。うちと、和
 敷、つづ、賊と誓。宝刀ととり、ある人、守の心気も異様ありんや。
 さらめ、賢妻これの、父ある人、黄泉も死せり。即座に、
 あり。ある人、家傳の神業あり。金瘡も死せり。即座に、
 あり。下と、魁生し。の、と常の如。戦場は、
 見たる人の、幸ある人、一色と懐中せり。加以、
 立つ、豊六が、旗雲の奇瑞あり。ある人、
 浄堂の金剛神影向し。力と戮あり。故に、
 敷討の悪棍が首伏せり。豊六は破山あり。金剛神と賭し、
 あり。亦時金剛神諭あり。汝志を改め、人となる。活業せよ。今より
 其の脅かすは、飛道の行状を命と其知、終るべし。と示現あり。
 あり。ある人、豊六は、賊と、力を獲て、
 剥き、殺し。ある人、三年なり。神罰音を脱し、
 あり。ある人、婦人を殺されり。より、丹精礼拜し、
 清く、扱ふ。其業用ひる。神助業力あり。即效あり。素大夫、
 驗ありと、遠く、懐探撈り。件の業、素大夫、

御談



時綱

為家卿

朽木が袖の

あつとも
えよ

山平翁

墨太

みまほくし
共間の
入江の

素大夫

丁七

かへで

あり衣

つと香

泣流るる楓波もあはれむい激しく。急な湯と汲まき。又子主従ゆる共の丹
 精と抽く。金剛神の冥助祈念。素大夫の妻と双抱し。涙もはたけけけと
 ちのくその口中へ件の茶と合されば。相の素湯と注ぐ。三人存一呼吸
 活る。耳く鮮衣丁七。忽然と甦生し。目み開け。四下と見。息吹と
 つたへ。衆皆これ小勢なり。素大夫の此彼と。残負の身へ唇とせ。凶箭の
 宝刀の盜賊と目。豊六なり。この。もろろと。鐵月形と。復せ。輝の
 執持正未時綱が。まよる。助首尾全く。連年の宿願。けい。一。日。不。果
 せし。の。い。遍。り。へ。へ。と。声。高。や。小。説。示。せ。ば。残。負。の。身。へ。勢。し。く。不。苦。痛。と
 忘。り。て。数。回。時。綱。を。伏。拜。し。鮮。衣。へ。又。こ。ろ。小。流。る。涙。と。あ。り。拂。ひ。世。を。塞
 翁が馬とや。人。墓。た。ら。ん。愛。又。絆。さ。し。て。人。を。殺。し。て。自。害。を。と。る。その。禍
 福。を。く。も。ろ。ろ。と。良。人。の。恥。辱。を。雪。め。世。を。や。廣。く。な。り。と。使。て。死。ん。だ
 存命と。お。び。お。び。い。ま。の。ま。つ。り。我。も。遙。く。は。り。け。り。只。形。ま。り。正。未。也。豊。六。と
 源。引。よ。せ。て。殺。せ。り。の。の。素。大。夫。が。り。妻。鮮。衣。の。疾。を。負。く。その。日。む。ろ。く
 かり。ぬ。え。と。ゆ。め。え。あ。げ。く。あ。ら。う。後。の。栄。由。一。し。ほ。る。く。ん。品。是。の。と。血。は。涙
 堂。々。合。さ。れ。ば。丁。七。の。ま。つ。り。坐。行。出。数。り。孫。と。某。が。願。ひ。も。あ。ら。う
 主人の。の。上。さ。る。の。ゆ。た。う。た。う。人。お。と。ま。へ。と。く。憑。と。な。り。と。い。ふ。も。む。ろ。く。死
 負。操。忠。義。の。子。その。子。と。え。う。ろ。と。不。便。や。心。を。そ。う。ろ。ん。と。養。ふ。考。ゆ
 ち。あ。へ。と。娘。次。よ。く。護。り。あ。ら。せ。て。後。も。哀。憐。と。あ。り。今。こ。ろ。こ。ろ。自。ら。の。け。し。と
 つ。ひ。あ。へ。ど。鮮。衣。と。丁。七。の。息。を。終。り。と。先。期。へ。あ。ら。う。と。話。す。終。り。楓。波。も。の。り
 共。は。声。泣。か。ら。せ。ば。素。大。夫。の。左。右。の。袂。は。包。み。の。涙。の。や。る。せ。る。た。骸。も。う。ら
 對。ひ。て。合。掌。し。家。我。成。す。と。賊。を。討。功。を。獲。り。玉。を。獲。り。婦。徳。を。れ。と。く
 情。縁。あ。ら。う。と。い。ふ。今。あ。ら。う。か。は。は。見。ぬ。四。十。八。輪。と。い。ふ。と。の。生。涯。又。妻。と

泣流るる楓波もあはれむい激しく。急な湯と汲まき。又子主従ゆる共の丹
 精と抽く。金剛神の冥助祈念。素大夫の妻と双抱し。涙もはたけけけと
 ちのくその口中へ件の茶と合されば。相の素湯と注ぐ。三人存一呼吸
 活る。耳く鮮衣丁七。忽然と甦生し。目み開け。四下と見。息吹と
 つたへ。衆皆これ小勢なり。素大夫の此彼と。残負の身へ唇とせ。凶箭の
 宝刀の盜賊と目。豊六なり。この。もろろと。鐵月形と。復せ。輝の
 執持正未時綱が。まよる。助首尾全く。連年の宿願。けい。一。日。不。果
 せし。の。い。遍。り。へ。へ。と。声。高。や。小。説。示。せ。ば。残。負。の。身。へ。勢。し。く。不。苦。痛。と
 忘。り。て。数。回。時。綱。を。伏。拜。し。鮮。衣。へ。又。こ。ろ。小。流。る。涙。と。あ。り。拂。ひ。世。を。塞
 翁が馬とや。人。墓。た。ら。ん。愛。又。絆。さ。し。て。人。を。殺。し。て。自。害。を。と。る。その。禍
 福。を。く。も。ろ。ろ。と。良。人。の。恥。辱。を。雪。め。世。を。や。廣。く。な。り。と。使。て。死。ん。だ
 存命と。お。び。お。び。い。ま。の。ま。つ。り。我。も。遙。く。は。り。け。り。只。形。ま。り。正。未。也。豊。六。と
 源。引。よ。せ。て。殺。せ。り。の。の。素。大。夫。が。り。妻。鮮。衣。の。疾。を。負。く。その。日。む。ろ。く
 かり。ぬ。え。と。ゆ。め。え。あ。げ。く。あ。ら。う。後。の。栄。由。一。し。ほ。る。く。ん。品。是。の。と。血。は。涙
 堂。々。合。さ。れ。ば。丁。七。の。ま。つ。り。坐。行。出。数。り。孫。と。某。が。願。ひ。も。あ。ら。う
 主人の。の。上。さ。る。の。ゆ。た。う。た。う。人。お。と。ま。へ。と。く。憑。と。な。り。と。い。ふ。も。む。ろ。く。死
 負。操。忠。義。の。子。その。子。と。え。う。ろ。と。不。便。や。心。を。そ。う。ろ。ん。と。養。ふ。考。ゆ
 ち。あ。へ。と。娘。次。よ。く。護。り。あ。ら。せ。て。後。も。哀。憐。と。あ。り。今。こ。ろ。こ。ろ。自。ら。の。け。し。と
 つ。ひ。あ。へ。ど。鮮。衣。と。丁。七。の。息。を。終。り。と。先。期。へ。あ。ら。う。と。話。す。終。り。楓。波。も。の。り
 共。は。声。泣。か。ら。せ。ば。素。大。夫。の。左。右。の。袂。は。包。み。の。涙。の。や。る。せ。る。た。骸。も。う。ら
 對。ひ。て。合。掌。し。家。我。成。す。と。賊。を。討。功。を。獲。り。玉。を。獲。り。婦。徳。を。れ。と。く
 情。縁。あ。ら。う。と。い。ふ。今。あ。ら。う。か。は。は。見。ぬ。四。十。八。輪。と。い。ふ。と。の。生。涯。又。妻。と

あつし。誘引の隨は客房の次の便室にたゞびくをり。素太夫のあり
る。倦む別と一妻と子ふ。又不憶環りあふ。その歎びの壁へべ死のめ
たむとどおとをり。時をとれとくかくやうぐみ取合へてとてころゆがて
ちか宿るがど。頼護く。針の席は坐る如く。襟尻の額紙拵むは外叔と
華洛もく。對面をりてあらあむとど。ゆへかくるるひての音づれやせん
よとむたぐ。そのち遙は後より。里見よとより。或は灰ふて妻子と
携安房上総へと赴くお上野る。仁田山もく。軍兵は却されて女房女見は
別とより。十年のちあむとむ。往方とまてとむ。外叔も又里見家の采地おのをい
し。今初俄に訪ふとこり。この神のなすたる。唐草も紅葉も又あふ
そらあふ。あふが如くん乳鳥のさむと。名告くむと。他の女見とて
かむる。片塊なむと。物成をりぬ。かうん。残やう。告げ死な。そのころゆがて
ほ。別と。後。は。いつゆと。や。と。同。つ。え。る。次。の。房。る。哭。声。と。や。せ。し。し。
うち咳はく。給らせ。天目法印。冷笑ひ。やよ。素二郎。虚乱。こま。吾侪が
湯杖一本で。十年妻子と。養。和。主。他。の。女。替。る。り。て。一。期。栄。人。と。り。み
との。皇天が。あ。は。ら。り。と。ぬ。と。と。く。と。と。又。脱。し。と。せ。べ。ゆ。り。と。せ。ぎ。と。
投。行。ゆ。り。先。の。ゆ。げ。た。む。し。し。れ。華。洛。の。擾。乱。は。住。憂。々。歌。文。の。歌。枕
羽。黑。猪。は。俄。托。く。俄。は。京。狐。出。し。親。族。も。告。あ。り。せ。は。出。羽。は。一。年。
陸。奥。ふ。又。一。年。送。り。つ。旅。より。旅。は。知。己。死。く。果。の。里。見。は。杖。を。駐。め。
軍。祭。は。加。持。祈。禱。一。升。米。は。一。生。と。皇。滅。ら。し。て。年。夥。由。舎。後。驗。の。み。の
お。く。里。見。と。い。の。上。総。る。采。里。の。浦。田。は。居。城。し。と。つ。ら。り。と。り。遠
く。入。る。義。堯。の。采。地。の。あ。ら。む。上。野。四。碓。氷。郡。の。郷。名。の。里。見。を
い。れ。あり。碓。氷。川。の。北。あ。ら。く。榛。名。山。より。西南。む。か。じ。和。主。が。主。君。と。憑。む

いれあり。碓氷川の北あらく。榛名山より西南むかじ。和主が主君と憑む

浦田殿とよの各氏の地なり。太郎義俊義成以下。数世あふ居城せり。かゝる
義俊七世の嫡孫又太郎義実也。難く遭く安房國へ推演り。子孫漸く其
地を闢りて。威を房総に振ひぬ。當今里見といふと。其の安房上総との
争ひの多し。和主の争ひあつた。その過失より。妻も子も仁田
山あき棄てし。その義俊と十とせふ。此の十月中旬。死にが
あつて。碓氷の碓澤へ赴く。越後の軍兵仁田山より。凱陣する。撞
見ら。道次はつれぬ。後陣は従ひ。雑兵が。生捕や。その年
をうろろる。女の子を棄て去ると。泣く泣くと泣く。彼武者の體の草摺
携り。振拂ひ。眼を睜じ。舎連の息女を。んと。そののゆるる。賽りの
実檢ゆ。入。か。眼は拾ひ。首ニ。三。ハ。獲。り。は。ま。わ。ぶ。買。て
あ。悔。し。跡。と。追。り。踏。殺。さ。し。と。罵。り。あ。ま。実。帳。と

走去ぬ。稚児へ仰さる。又倒して。儘哭啼と。索く。あ。の。終。て。ま。れ。ば。
外。の。あ。れ。は。涙。と。な。れ。と。抱。起。し。里。と。向。親。の。名。義。尋。と。西。の。う。そ。積。重
の。浮。り。外。不。回。答。え。せ。其。方。の。村。ま。ど。わ。く。ゆ。ぶ。あ。つ。る。人。も。あ。ぶ。不。
と。多。く。騙。あ。ら。う。と。我。掖。く。ゆ。ほ。ご。行。装。せ。と。え。る。三。才。を。う。る。
見。と。抱。き。以。鬢。と。肩。へ。あ。り。乱。し。前。面。より。走。り。あ。つ。ま。る。この。女。の。子。と。還。よ
ん。忽。地。に。我。抗。声。と。立。や。唐。草。我。痛。や。や。答。え。つ。ふ。と。向。つ。て。抱。け。ば
め。こ。あ。い。や。推。り。さ。る。紙。を。放。母。は。嘯。と。ゆ。び。う。け。も。軀。て。走。り。襲。か
女。の。子。の。忙。し。推。り。さ。る。紙。を。放。母。は。嘯。と。ゆ。び。う。け。も。軀。て。走。り。襲。か
程。よ。れ。も。亦。歩。の。運。び。我。の。そ。じ。と。母。と。ゆ。く。と。え。る。と。ん。ま。京。の。道。の
片。境。と。多。ひ。び。う。ら。れ。の。う。そ。ま。び。り。の。泣。り。と。彼。の。彼。を。人。と。思。は。れ。は
う。ろ。ろ。の。残。告。和。主。と。吾。倍。我。心。あ。て。安。房。の。里。見。へ。赴。く。に。仁。田。山。の。義。俊
ゆ。め。あ。り。と。夫。婦。が。厄。難。ゆ。め。あ。ま。ま。く。曾。つ。が。ま。と。唐。草。が。雜。兵。と

せす。と云ふ。曩に上総言吉違る。里入が家より馬。やも月草津小湯

治さる人よ。夏織の相沢賣人と云ふ。物駝馬は負し。やも彼如く。あさ

つるあまふ半の幸さる。と云ふ。彼如く。又武流る。石濱まで。好まし。馬の

脊を種ら。くれ。と云ふ。辛苦流る。と云ふ。やも。やも。の。あ。あ。

あ。

偶田河の。と云ふ。道次の神社毎。千社結の名簿。貼。唐編素二郎

宗郷再拜。敬白。と云ふ。曩に上総。刻。わ。寮。と云ふ。と云ふ。と云ふ。

出。と云ふ。件。の。簿。を。と云ふ。一枚。引。削。と云ふ。と云ふ。と云ふ。

搔。撈。り。と云ふ。か。片。境。を。れ。を。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。

と唐草紅血。り。共。は。

これ。又。何。疑。ふ。べき。素。二。郎。の。由。の。年。來。妻。子。の。往。方。を。り。と云ふ。これ。は。乃

事。以。て。云。ふ。是。果。よ。と云ふ。環。り。會。へ。十。年。妻。子。の。養。育。法。大。る。と云ふ。小。る。と云ふ。取。て

や。か。と云ふ。今。茲。に。越。ぐ。と云ふ。大。晦。日。と云ふ。引。け。居。る。と云ふ。敵。対。的。に。と云ふ。と云ふ。

ゆ。と云ふ。捷。徑。に。ゆ。と云ふ。と云ふ。日。を。吉。日。を。て。屋。賣。居。と云ふ。洛。費。と云ふ。定。弱

女。原。と云ふ。伴。ふ。と云ふ。菴。仲。と云ふ。出。て。と云ふ。是。身。首。の。佛。閣。彼。首。の。神。社。果。と云ふ。

和。主。が。名。簿。あり。と云ふ。薄。の。末。と云ふ。い。ゆ。と云ふ。索。に。を。彼。と云ふ。と云ふ。宿。所。に。定。り。と云ふ。

と云ふ。現。究。竟。の。葉。よ。と云ふ。と云ふ。四。人。む。と云ふ。と云ふ。賞。嘆。と云ふ。母。目。の。途。を。と云ふ。と云ふ。

石。濱。ま。と云ふ。と云ふ。回。へ。と云ふ。唐。編。と云ふ。素。二。郎。も。名。告。る。人。の。終。と云ふ。と云ふ。と云ふ。

今。又。疑。念。よ。て。と云ふ。何。の。末。或。究。ん。と云ふ。隅。田。河。る。船。入。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。

と云ふ。口。酸。と云ふ。梅。若。の。昔。か。と云ふ。加。久。繩。水。の。續。流。外。と云ふ。日。へ。と云ふ。と云ふ。

早。る。船。は。乗。れ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。牛。嶋。の。牛。小。牽。と云ふ。神。結。其。如。と云ふ。和。主。が

五山後詠

名簿あり又只中と申程ふと云名なる葛飾の真間の御見名の神祠より
 あるてある薄もほあるまじと芋環の途よりか味酒の三輪なるそ
 枚とて門ふ立ちうこさるるあるの翁真白る眉を聳めく沈吟し素
 二郎と云人のあつらうとておぼせくは素大夫といふ人の如此の知れり
 のこれゆりやと答るは行勝たる一個の武士罪人と縛れて従者小牽
 つの件に門は過りぬる翁はてやこを死んて里見家の執柄に正永殿とて
 めとの彼刀祢やう来地はありとある。民敷帳と流るる人となつてはありあり
 人や従者は向めんと指さし誨らふ吾侪慌忙と飛が如く走り著又如此
 如此と尋ねれば正永殿えりて件の唐橋素二郎へ継摺氏の女壻ふたりて
 名は素大夫と更なり。今や十年経たり。よくそのころは成りてせよ
 といふとて従者立止り前回はんぬり槐樹へ継摺が宅地なる。向て唐橋
 素二郎へ継摺氏を冒す。名は素大夫と改む。八九歳なる女見あり。あふ
 年來他郷はありがけお恙るるうらあは素大夫と尋よと叮嚀小説示て
 遠く走去ぬまは和主が縁故未歴定うは宿所を志するへあのお
 他とてと子まが生る入壻三味はこれらも腹たさ小片塊が
 宵のほもむる富士の煙も淡間嶽もかすまむのあどじりの火とあり
 汲つ先は立門の槐と的めく。命矢のぞく走りや折戸といふ縁側は
 立在む和主が容れあうけらるるや百人かこちと向くと面を皮と推刺す
 熱腸と冷んとさひうとを是やまの支の顛末鏡竭さ終る吾侪が
 恩義も片塊が節操もあつとるうらるる。囃さけらるるく小止り
 るはや小老武者の哀さるん呪疲勞と息續うげ。志するとは陣はあさん
 といつ諸肌推脱く扇づひり肘と張る。叔父とて年終り片塊へつとあて

夫の膝へ膝さる著く胸前死諸のみ合もく酸鼻滅さくる人あらう哉
 鬼と蛇とゆゆめとど。焼野の雉子夜の鶴妻と索ね子とちり小天
 ちと恩愛まむう表るたりの死結ぶへ名の草枕羈旅の危難
 少く妻と指子と棄て。才ひらう栄利死謀くとし。とんちんけして憂ふ
 塩易ぬ操は姫松成守と三月く十久りの春社成すや迎つ。長女ハ十四
 二女ハ十二小ぞるりゆる。彼ホガ脊長伸るや。物の没却の胸くはく叔又と
 しくその家よ。かる劬勞は苦哉やしく。望ま終ぬ親の欲形ちのき世哉
 ころるとも元緒ろぐく王匣や。親るがうらち揃ひ予れるる子どもら
 為らるるり村肝のころつて。憑りかぐん。とよつかけ。よつけて。あつと
 の。ひつら。ふまの。あよる年の妻と果し。目小んえと。や。終ぬ。勤。小袖。ぬ。とて
 涙は洗ひささし。る。表裳の。切。わ。ち。と。と。め。ぐ。り。あ。り。ん。と。旅。衣。を。る。ぐ。は。く。と。

二撃の家は隠れく他妻は子こ産く愛くあつて。変じ。夫少のいひを
 る。死事る。人の夫と。か。め。の。白。根。と。花。や。淫。婦。と。め。の。怒。の。限。り。の。い
 竭。恥。か。が。ら。し。と。諸。も。小。死。る。外。さ。も。は。後。婦。と。の。死。と。ま。の。出。し
 め。と。高。や。ち。小。敦。團。ろ。ぐ。く。會。ら。衣。領。死。淡。緒。は。糾。く。前。引。後。推。の。指
 啖。の。と。ん。る。の。力。と。ま。ま。だ。死。意。馬。は。散。つ。天。目。法。下。汗。推。拭。の。拭。と。鉢。巻。の
 ち。と。膝。う。ち。拍。し。片。境。負。ら。る。席。薦。の。縁。鼻。つ。ら。搦。か。が。ら。あ。つ。せ。よ。十。年
 妻子の艱言。價利は利と加く。あひのや。ある受と。後。いつ。迄。の。吾。侪。は。こ。小
 居敷り。今。より。隱。居。と。唱。せ。危。固。と。食。ご。の。こ。ま。ら。り。の。樂。せ。ご。ん。や。
 入。壻。は。あ。と。下。く。と。實。さ。ぐ。女。房。子。と。の。あ。る。れ。引。入。る。と。不。義。淫。奔
 ち。つ。と。せ。終。バ。繚。果。も。翌。立。と。待。ぐ。觀。面。の。女。の。子。り。共。追。せ。せ。よ。思。狀
 ち。と。由。あ。し。と。う。脱。さ。ま。と。む。い。火。氣。焼。つ。け。ら。と。く。い。と。く。泣。声。を。と。



二條太皇
太后肥後
あやしの
ととえうらゆ
さりゆら
あまの
うま
まの間の
つき橋

片りい

主事大夫

入少



天目法印

うへ

うへ

から草

得失明也。愧と忍びておぼくは片塊の奴よりうらやまはる果ては或は
 子とて棄まると宣ふもの。榮利は引とるりまは里見殿の姉とて救ひのへうも
 あらまじ。これ等の故は唐草の棄りしてゐる疑ひる。と蒲扇鼓く怒むれ。
 天目法印領るし片塊よとて話する。それと推して野るを彼恩の義と
 いらすとて妻以相子と棄て。他の新郎よるる僻度以恩もいふれ。義理と
 いふれ四の五も没らむ。眼前彼女房とて入る。去さるるとも又まらるる
 と。いづれ恩義の軽重と。業の秤よりけりせん。彼女房とて入らせとて
 召びよせと逢ふ人と。嗔るやややく禁む。こゝろをいへる。池邊の宿屋を
 訪めと目く尋思。いづれ叶ぬとるが。昔はぐとてあともあまてお疑れて
 隠ひて由る。るまは隨鮮衣以今宵直まよせり。えんそ送送する。従者お
 究竟の人とてあはれ。この人へ是別人るま。片塊が幼稚とて又追とて見

例之助おとくけのあえまら。鮮衣のろ共彼奴より。まづ對面しめ入る。
 とらひり立ち客房なる障子を左右へ推開け。結とて入る。叔姪胞妹。曾
 うち驛ぐ狂死の光景。血は塗とてる三個の死骸へ。羊木のぞく横り。成る
 女の子赤は泣沈て。かゝるを以て擧げぬ。これいふ。とまらり。おちまて
 面あり。おのく。貌更とて素大夫も又嘆息。とて。おちまて。女房。鮮衣を
 被へ。繼橋。糟代の私率。依留。丁七といふ。めえ。頸る。死骸へ。片塊が。離別の見
 例之助。その乳の下は痣あり。かゝる。例之助。おちまて。おちまて。おちまて。
 う。又鮮衣が亡骸の。けり。ふとら。女見。相手を。僅に九才。又丁七。は。けり。
 とら。渠が。女見。後。多。某。晨。は。棄。と。これ。宝刀の。賊。と。つ。の。旅。より。旅。あ
 手。を。思。ひ。今。茲。上。野。なる。草津。め。て。例之助。は。環。會。桶。川。や。と。伴。ひ。し。が。
 きの。み。如。此。の。故。あり。と。某。其。丸。は。吊。り。渠。は。書。簡。以。贖。して。こ。が。宿。所。へ

ませし鮮衣は洲之助を良人の讐敵と云ひあやまち若戦しこと
殺し縛果るる其の途しそごうまらる彼洲之助の仇るる縛
分明に説示せし鮮衣丁七情愧は地を忽地自殺したる正末時綱諸本
多しこの洲之助の盗賊の目録に六と悔れしるめりま當り
親ホ首伏より縛着る渠が隠しりてる刀をあらうとあり
しりし某物さむむたむと。かて件の刀をらる果し年来
素る織月形の宝刀より鮮衣丁七本のひびける功名て夫の
るは取次雪丸烈女義僕と稱せり。とるは瓜の筒様。尾は状貌は如此
如此と洲之助が夏の顛末言ませり。物さる。寒は輪回忘報る影と
形異なるを某誓く片塩と唐草紅血ホを棄ねども。彼方も志し
存じも定るる後がさるる。鮮衣が新郎よりしり。更し一個の刀を

奉十年より及びの月の日鮮衣不慮に世去る。前妻片塩素蔵く。
舊縁は復結ぶこと。彼彼ひ彼彼々。あつと偶々も。天命窮達
聚散もかるる時あり。産美のござられ致す。夫婦の情縁へ
今茲より三年ある。某件の宝刀を索く。この昔飾紙起程日大誓
紙に記し。そのの神社毎に社詣の名簿を貼し。主
君へ。彈より。あつと。継指素大夫と書由。寫さ。延唐篇素二
舊名氏頭たり。この片塩ホが存命。り。これ。つる。と。わ。め
減ハ一事西用上野下野越後陸奥。る。其。薄の。数。や。二。社。満。道
彼此。遠。つ。立。つ。ま。間。の。里。子。見。名。の。神。祠。を。打。ら。ふ。せ。げ。の。小
あつと。和。君。あ。く。ま。ら。ぶ。神。の。冥。助。も。只。人。の。滅。し。り。を。願。ふ。は。是
て。疑。念。散。し。悪。人。な。ら。う。と。洲。之。助。の。片。塩。が。見。る。は。首。の。浦。田。へ。衆。人

とひひまふらへくしつちあまのまふらへくしつちあまのまふらへくしつちあまの
 愚痴をいふとまことと惜とつらふ滅と勸解のせがひのつらふのつらふのつらふ
 こころをいふとつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふ
 得はつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふ
 むぢもくぞとつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふ
 唐草の紅血と真の妹とつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふ
 慰むとつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふ
 腰のつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふ
 涙の紅とつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふ
 心とつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふ
 かくつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふ

その女児とつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふ
 こころをいふとつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふ
 外叔の恩と報とつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふ
 儂とつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふ
 暮つらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふ
 備ひその曉は鮮衣本二人の亡骸と弘法寺へ送るのつらふのつらふのつらふのつらふ
 せめて只瓶とつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふ
 こんとつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふ
 果の追とつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふ
 おれとつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふのつらふ

皿皿 郷談 卷之五 終本重

日本百將傳一夕話

全十冊 松亭金水 柳川重信畫圖

此書は佐青林野山先醒その人物と億兆の中より擇むる百將傳と云
 せし是則 神武天皇東征の御時頃以奉て勲績高き道臣命に助す
 元龜天正の隙に至りて千古獨歩し豊太閤公は畢る其年數九千二
 百餘 帝王二百八世と經たり。上古中世近世と時代易るのそ
 一官員あり良智を將その行ひも一あり代推謀智略を變化あり。
 これが此書と存在るは秘と秘と巻と関は其時代の風俗及び一
 共人の出月家系或は泳哥。詩文の佳句是又夫と連る人とお
 は金水老人が多幸の丹波柳川氏の繡像今近綴遊戯書と母
 志く聽はるるをたれ

